

経済学のトビラをあけてみよう！

～世の中を経済学の目で見るとということ～

総合政策学部

准教授 伊藤 健宏

本講義では、①「小さい政府」の基本となる考え方について概観します。小さい政府とは、基本的に人々の経済活動に関与しない政府のことを言いますが、そのような考え方が生まれた背景について説明します。続いて、②「大きい政府」の基本となる考え方について概観します。大きい政府とは、人々の経済活動に積極的に関与する政府です。この考え方は「小さい政府」的な政策の反省として生まれたものですが、なぜ、そのような考え方が生まれたのかについて解説します。最後に③現在の政策についての所感を述べます。本講義が、経済学というツールを用いて世の中を見るとはどのようなことかを知るきっかけとしていただければ幸いです。

1 「経済」ということば

はじめに、「経済」という言葉について立ち返ってみましょう。言葉の成り立ちや本来の意味をあらためて掘り返してみると、意外な気付きがあるものです。

太宰春台（1680-1747）は彼が著した『経済録』（1729）という書物において、「経済」について次のように記しています。

『凡天下国家を治るを経済と云、世を経め、民を済ふを云ふ義なり』

すなわち彼は、国家をよりよくするための政策を積極的に行い、その国に住む人々の生活を救うことを「経済」と述べています。また economy は $\omicron i \kappa o \varsigma \quad \gamma o \mu o \varsigma$ （オイコス ノモス）というギリシャ語が由来となっています。 $\omicron i \kappa o \varsigma \quad \gamma o \mu o \varsigma$ は「家政術」というべき言葉です。このように「経済」も economy も、本来はお金儲けではなくむしろ人々の生活に関わる言葉です。

2 Adam Smithが影響を受けた思想（重商主義と重農主義）

この節では Adam Smith（1723-1790）が影響を受けた二つの思想、すなわち、重商主義と重農主義について解説します。

2.1 重商主義

重商主義とは、商工業を重視し、国家の産業を保護・発展させ、国内の富を充実させようという思想のことです。

重商主義に依拠する政策の基本を2つ抑えておきましょう。第1に、貨幣、特に金や銀などの貴金属の価値を重視するということです。国内においてこれらの貴金属の蓄積を図ることが重商主義的な政策の大きな柱です。第2に、国内の貨幣蓄積を図るために、積極的に貿易と国内産業の保護を進めたことです。国際的な競争力のある財については積極的に輸出し、国際的に競争力の弱い産業分野については、徹底した保護を行うことでその目的を達成しようとしてきました。重商主義に

依拠する政策を行うと、必然的に政府の経済活動への干渉が大きくなります。

重商主義の考え方を重視すると、究極的には自分の国さえ豊かになればよいということになるので、自分の国で作ったものを独占的に売ることができる大きな市場や、安い原料を簡単に入手できる土地などを囲い込む政策が幅を利かせることになります。つまり、世界各地域に植民地を作る発想が出てきます。しかし、植民地の拡大に伴いその維持のために多額の経費がかかること、また、一部特権商人の増加による富の集中などの大きな問題が発生しました。

重商主義による政策を実行した代表的人物としてColbert（1619-1683）などがあげられます。Colbertは次のような政策を行いました。第1に特権的貿易会社を設立し輸出向け商工業の保護・育成を図りました。この政策は一部の特権商人などに運営を任せる形で執り行いました。結果として、富が一部の人間に集中するという結果をもたらしました。第2に、農業従事者の賃金を安くし、輸出するための穀物の価格を下げようとしてしました。輸出穀物の国際競争力を向上させ自国に富を蓄積するために、まず生産にかかるコストを下げる政策を採りましたが、当然のことながら当事者である農民は大反発をしました。このような政策に対する人々の反発が重農主義的な思想の原点になったといわれています。

2.2 重農主義

重農主義とは、農業を重視し個人の（経済）活動の制限に否定的な考え方のことです。重農主義の考え方のポイントを2つ抑えておきます。第1に、重農主義の考え方にあっては、農業を国富の増大にあたって重要な産業と位置づけます。そして商工業の発展は、農業生産によ

り原材料が供給されることによって初めて実現するものと捉えるべきと考えます。第2に、個々人が利益であると信じて行動することこそが結果的に社会の利益となるので、人々の生活（すなわち経済活動）に法などによる制約を加えるべきではないと考えたことです。

3 Adam Smithの経済学

Adam Smithは経済学の祖と呼ばれることがあります。その所以は、重農主義の思想を批判的に継承しつつ、需要と供給の関係は市場に任せることによって自動的に調整されるという考えを初めて作ったことによります。

人々が利己心、すなわち、できるだけ少ない労働と費用でより多くのモノを得ようとする欲求に基づいて行動すれば、自然に市場において取引される量と価格が決まってくるということを示しました。需要と供給の関係は市場に任せることによって自動的に調整されるという考え方を「価格メカニズム」などと呼びます。この「価格メカニズム」はその後の経済政策の大きな柱となりました。この考え方をもとに政策を行う政府のことを「小さな政府」と呼びます。

4 J.M.Keynesの経済学

この節では1929年前後のアメリカの経済について触れ、その後J.M.Keynesの考え方と「大きい政府」について解説します。

4.1 世界恐慌前後のアメリカ経済

1929年以前のアメリカ経済はバブル経済（=株などの資産価格が適正価格からかけ離れて上昇していく現象）だったと言われています。すなわち、各企業の本当の実力とかけ離れた株価の上昇が続いていた

ということになります。1929年10月24日、ニューヨーク市場で株価は大暴落します。「世界恐慌」の始まりです。株価の大暴落により、1929年以降のアメリカ経済は投資離れが加速度的に進みました。そのため企業の資金繰りは急激に悪化します。企業は資金調達に苦慮し、そこで働いている人々に支払う賃金総額を減らすことを選択する場合もあります。場合によっては解雇せざるを得ません。この時期、アメリカでは最大で約25%の失業率を記録しました。

ここでバブル経済のメカニズムを簡単に触れておきましょう。単純化のため、初期の株式市場は株式に強く関心を持つ人々によって構成され、かつ、他の経済に影響を与えないほどのごく小さなマーケットの形式で運営されるものと仮定します。この市場で需給の不均衡が起こったとしても、他の経済に対する影響は限定的なものです。しかしこのごく小さな市場の中でさえ、需給バランスが崩れると、高い値段で取引される株式が表れてきます。

そこに、基本的に株式に関心を持たず、お金儲けのことだけを考えて行動する投機家が参入し始めます。彼らは利にあざといので、いかにうまく売り抜き、買い入れるかということにのみ執着し、着実に株式の取引によって利鞘を稼ぎます。この状況を一般の市民も当然観察します。株式は儲かると思い込み、彼らもまた、株式市場に参加します。このように、当初の株式市場に比べるとその規模は大きくなります。やがて大きくなった市場においても株価が高騰するわけですが、あまりにも高すぎて買い手がつかない状況が発生します。その後は需給バランスを取るために値崩れが起こります。そして人々が、株は投機の対象になりえない可能性があるという心理を持ちその心理が広がっていくと、人々は株式を次々と売りに出し、さらに値崩れが大きくなり

ます。株式の値崩れは企業の資金調達に悪影響をもたらす結果につながります。これが簡単なバブル経済のメカニズムの説明です。

話を戻します。世界恐慌前後の政府は、失業者が増加する状況をそれほど悲観していませんでした。働きたくとも働くことができない失業者が大量に発生しているのは一時的な現象であると認識されていたのです。当時は古典派経済学に則った政策を行っていました。古典派経済学の考え方をを用いて現状を捉えると、労働市場においてもマーケットメカニズムが機能するのであれば、賃金が適切に調整されることによって、労働需要と労働供給のバランスが保たれます。よって賃金が下がることによって失業は無くなるはずと考えられていました。

4.2 J.M.Keynesの経済学

実際には働きたくとも働けない失業者の数は減少しません。ここでJ.M.Keynes (1883-1946)はこの現象に対するある答えを出しました。

簡単な図を用いて説明してみましょう。図1は古典派経済学的に労働市場を考えた場合の図です。労働需要曲線は求人数と賃金の関係を表します。労働供給曲線は求職者数と賃金の関係を表します。

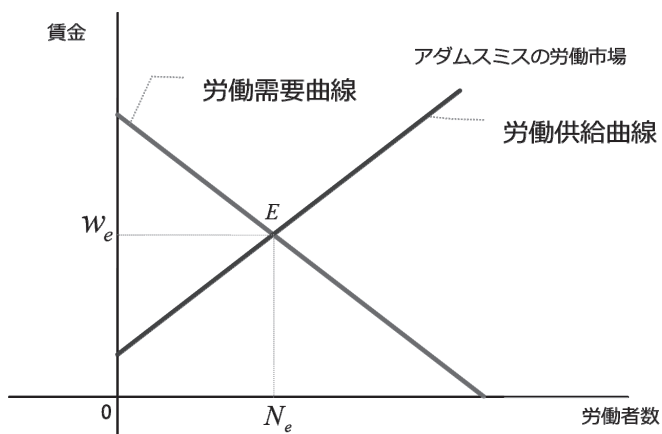


図1 古典派経済学的に労働市場を捉えたグラフ

このように、需要と供給が一致した点で賃金水準 w_e がきまり、それに基づいて求人数と求職者数が一致する点も決まります。この図を見るとこの賃金水準 w_e で働きたいと考えている人は全て雇用されることがわかります。

しかし、この w_e という賃金水準が生活を維持できるだけの水準であるという保証はありません。また企業側からみても、賃金水準をある一定の水準から下げるということは、企業の生産活動を阻害する可能性もあるため、容易に下げられません。このような理由で、通常の財と価格と違い、賃金水準はある一定水準からは下がらない（賃金の下方硬直性）であろうということを前提に、J.M.Keynesは労働市場に関する考え方を改めました。図2を用いて説明します。

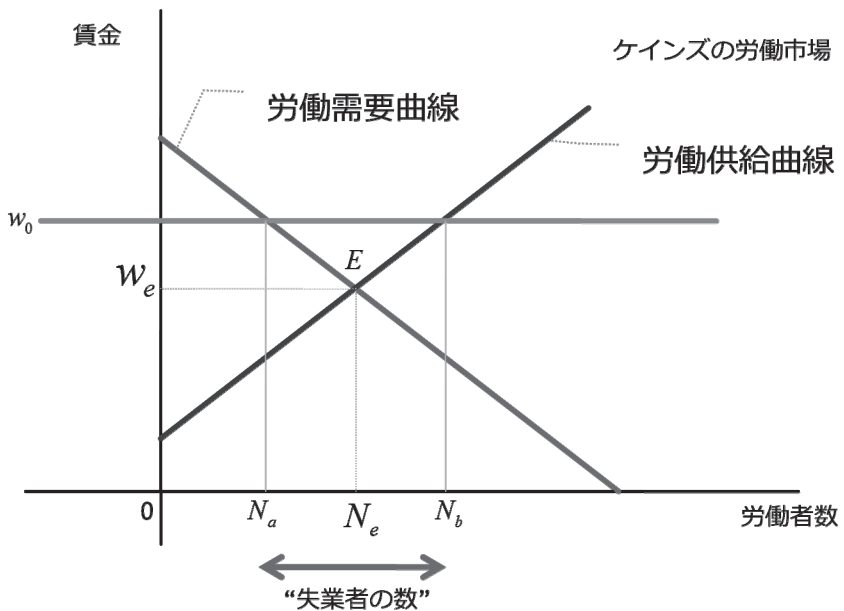


図2 J.M.Keynesが考えた労働市場のグラフ

議論の単純化のため、社会的な状況により現在の賃金水準が w_e より高めの w_0 と決まっていたとします。 w_0 における求人数は N_a です。一方、 w_0 における求職者数は N_b です。賃金水準 w_0 のもとでは、求職者数が求人数を上回っています。つまり、賃金水準 w_0 のもとでは、働きたくとも働けない人が存在します。古典派経済学が言うところの価格メカニズムでは、必ずしも失業問題は解決しないことがあることが明らかになりました。価格メカニズムが適切に働かない場合は、政府が主体的になって財政政策（公共事業）を行うことで、経済は安定するとJ.M.Keynesは説きました。

ここでは例として労働市場について考えましたが、現実にはそれだけでなく、価格メカニズムでは問題の解決が難しい事象がいくつもあります。教育や環境問題などがその代表例です。そういった事象には政府が積極的に介入する必要があることが、さまざまな研究によって明らかになってきています。

このように、政府が積極的に人々の経済活動に介入する政府のことを「大きい政府」といいます。現実に行われている政策を「大きい政府」と「小さい政府」に分けて考えてみると、図3のように表すことができます。

大きい政府	小さい政府
財政・金融政策の強化	財政・金融政策の抑制
規制強化	規制緩和
雇用問題への積極的介入	雇用問題には消極的
社会保障への積極的な取り組み	健康・医療等は個人の問題
etc	etc

図3 「大きい政府」と「小さい政府」の対比

5 現状の政策について

現実には二律背反ではなく『「大きな政府」的政策』と『「小さな政府」的政策』をうまく取り混ぜて政策を行っています。たとえば、アベノミクスは図4のように解釈できるかもしれません。

	「大きな政府」的政策	「小さな政府」的政策
第1の矢（金融政策）	○	×
第2の矢（財政政策）	○	×
第3の矢（成長(?)戦略)	△(○寄り政策が多い?)	△(規制緩和政策など)

図4 政策の整理

「第1の矢」「第2の矢」はJ.M.Keynes以来の伝統的な総需要管理政策を拡張させたものとして、また、「第3の矢」の規制緩和政策は（新）古典派的要素を含むものとして捉えるべきでしょう。これらの政策を行うにあたり、日本の現状と絡めて説明します。

まず、現在の需要不足は、J.M.Keynesなどが想定しているような、所得が無いことによって発生する需要不足とは質が違います。ある程度必要なものがそろっている状態で、新たな需要を掘り起こすのは相当困難だと考えます。次に、国内の生産資本は、内需あるいは外需に対しても応えられない状況ではないだろうかという懸念があります。つまり、需要に応えられない生産資本がだぶついている可能性があるということです。また、生産における構造改革を促すということは、生産にかかるコストを減らしていくことなので、当然物価を下げる要因になります。そうなると、仮に実質的な生産が上がったとしても、物価の下落の効果が上回れば、名目の生産額が大きく低下することは十分にありえます。

現状では、人口減少など経済成長を阻害する要因が勝っているので、それらを取り除く政策を積極的に行わないのであれば、経済成長を前提としないで財政運営を考えることを優先するべきではないかと考えます。私は社会保障制度の在り方を経済学の論理で考えることを生業にしています。社会保障制度を持続可能にするには、制度を支える財源が必要になります。そのためには、負担する人の数を増やす、もしくは負担する人の生産性を向上させて賃金水準を増やすといったことが考えられます。しかし、後者の選択肢は「はっきりしない成長戦略」に大きく依存するため、劇的な向上が可能かどうかについては不明確と言わざるを得ません。

また、人口の増加についても妙案が出ているとは言い難い状況です。このような状況であるならば、現状をある程度受け入れ、今ある資源の効率的な配分について検討することがきわめて重要です。

時代の流れとともに、経済学も経済に対する考え方も変化していきます。本講義がそのことを考える機会となれば幸いです。

【参考文献】

1. 榎本弘（1980）『近代経済学入門』高文堂出版社
2. 松下正弘、大住圭介、中込正樹、平澤典男（1990）『チャートで学ぶ経済学』有斐閣
3. 八木紀一郎（1993）『経済学入門シリーズ 経済思想』日本経済新聞社